

ヒマラヤキャンプ 2015 報告書

総括

ヒマラヤキャンプ 2015 隊長
花谷泰広

ヒマラヤキャンプ 2015 は、表面的には大成功だったと言っていいだろう。しかし、実情は反省も課題も山積。何とかギリギリ登って帰ってきたというのが実感である。

11月8日のランダック登頂日。頂上の手前に立ちはだかったヒマラヤ襲の稜線を見て、これは大変なことになってしまったと思った。私にとってはいつも通りの展開だったが、若手二人にとっては初めての地形。手に余る内容であることは明白だった。しかも、登頂後は必ずここを通過して帰らなければならない。固定ロープを持たない我々にとっては、行きと同じかそれ以上の労力を費やしてこの稜線に戻らなければならない。時間のことを考えても、引き返すならこのタイミングだった。

ちょっと冷静さを欠いていたかもしれない。プロジェクトを立ち上げた最初の登山を何が何でも成功させる、という気持ちが動いたのは間違いない。登山の判断としては、間違っていたと言われても言い訳はできない。最低限のプロテクションでのトラバース。安全性とスピードを天秤にかけて、どちらかというスピードを優先した。何が何でも登頂するためだ。スピードを優先させるということは、後続する二人を全面的に信頼するしかない。一人のミスも許されない状況を、彼らは私の様子から察していたに違いない。

考えていた登頂予定時刻よりも一時間ほど遅れてしまったが、どうにか登頂できた。塩谷は涙ぐみ、蒲澤も安堵の表情だった。しかし、私はこの時味わった孤独感を忘れないだろう。パーティーを組んでいるにも関わらず、ベースキャンプで仲間が見守ってくれているにも関わらず、誰にも頼ることができない状況。これこそが、このプロジェクトを行う上で、一番大きなプレッシャーなのだと感じた。

誰にも頼ることができないと悟った瞬間から、少し冷静さを取り戻りたように思えた。いつもよりも少し時間をかけて、ひとつひとつの作業を確実にこなすことを心がけた。若手二人も、少しは場慣れしたようにも思えた。結果的に最終キャンプに戻る頃には真っ暗になっていたが、安堵感と疲労感に包まれてテントに入った。同時に、「これでよかったのか？」という、なんとも複雑な感情に包まれていた。

「これでよかったのか？」

それは終始私が二人を引っ張ったという事実に対してだ。

ヒマラヤキャンプ、つまりは合宿を名乗っている以上、これはトレーニングでもある。必ずしも登頂をする必要もなければ、私が先頭に立つ時間やタイミングは、しっかりと見極めなければならない。帰国後もしばらくはそのことで頭がいっぱいだった。

しかし時間が経っているいろいろと思い返すようになってから、やはりあれで良かったのだと思っている。あの状況で、手取り足取り何かを指導することなど、所詮無理な話である。私が黙々とこなす背中を見て、彼らなりにいろいろと感じ取ってもらう。それだけで十分ではないか。どれだけ準備をしたところで、経験の差が歴然とある者同士がパーティーを組んでいる以上、それが限界だろう。

下山後、二人と話をする時間はたくさんあった。二人とも、自分の力が通用しなかったことに落ち込みはしていたが、これからどのように山と向き合うか、具体的にイメージができるようになっていた。その気付きこそが、この合宿の最大の目的でもある。

私はこのプロジェクトでチャンスを提供するだけである。自分の意志でつかみとったチャンスから何かを学び、活かすのは参加者次第。その気付きを今回若手に提供することができただけでも、私は大成功だったと胸を張って言うことができる。残念ながら途中で帰国せざるを得なかった松田の体験も、ある意味強烈だったに違いない。それもまた、ヒマラヤ登山である。

若手三人の今後を見守りつつ、いつか自分の本当のパートナーになってくれることを期待したいと思う。

プロジェクトの実施にあたり、スポンサー、及びサポーターになって下さった皆様に改めて御礼申し上げます。別ページにてご紹介をさせていただきます。

メンバーリスト

名前：花谷泰広（はなたにやすひろ）

係：隊長、渉外

年齢 39 歳

名前：榊原嘉彦（さかきばらよしひこ）

係：副隊長、医療（正）、会計（副）

年齢 41 歳

名前：柏澄子（かしわすみこ）

係：梱包・輸送（正）、医療（副）

年齢 48 歳

名前：松田浩和（まつだひろかず）

係：装備（正）、輸送・梱包（副）

年齢 24 歳

名前：蒲澤翔（かまさわしょう）

係：会計（正）、保険（正）、食料（副）

年齢 25 歳

名前：塩谷晃司（しおがいこうじ）

係：食料（正）、装備（副）

年齢 21 歳

行動概要

- 10/13 カトマンズ集合
- 10/14~16 カトマンズにて登山手続きおよび準備
- 10/17 カトマンズ~ルクラ、ルクラにて食料等の買い出し
- 10/18 ルクラ~モンジョ
- 10/19 モンジョ~ナムチェ
- 10/20 ナムチェ~ターメ ナムチェにて花谷・松田は体調不良のため停滞
- 10/21 ターメにて高度順化 松田が先行隊に合流。花谷はナムチェに停滞
- 10/22 ターメに停滞 松田が高度障害のため榊原とナムチェへ。花谷は肺炎の疑いのためヘリでカトマンズ内の病院へ入院
- 10/23 先発隊はターメ~タランガへ 松田は高度障害のためヘリでカトマンズへ 榊原はナムチェからターメへ
- 10/24 先行隊はタランガから BC まで偵察および高度順化 榊原がタランガで合流
- 10/25 先行隊が BC 入り
- 10/26 BC にてレスト
- 10/27 BC から C1 まで偵察
- 10/28 C1 に荷揚げ 花谷がカトマンズ~ルクラ~ナムチェへ
- 10/29 降雪のため停滞 花谷がナムチェ~ターメへ
- 10/30 C1 まで積雪状況を偵察 花谷が BC まで上がってくる
- 10/31 C1 まで偵察 花谷が BC に合流
- 11/1 C1 にて一泊
- 11/2 C1~C2~C1~BC
- 11/3~6 BC にてレスト
- 11/7~9 花谷・蒲澤・塩谷がランダックへアタック
- 11/10~11 BC にてレスト
- 11/12 花谷・蒲澤・塩谷でランシャール取り付きの偵察
- 11/13~15 花谷・蒲澤がランシャールへアタック
- 11/16 BC 撤収準備
- 11/17 BC 撤収、ターメへ
- 11/18 ターメ~ナムチェへ
- 11/19 ナムチェ~ルクラ
- 11/20 ルクラ~カトマンズ
- 11/21~24 カトマンズにて後片付けおよび観光省にてブリーフィング
- 11/25 解散

登山報告

ランダック (塩谷)

11月7日(土)快晴 BC~C2

BCに残るメンバーと固い握手を交わし、いよいよ出発の時を迎えた。テントや、食料の一部、アイゼンやアックスはC1にデポしてあったため荷はそれほど重くない。それでもアタックザック一つでは入りきらなかったので、C1までは愛用のガッシャブルムを使った。何度も往復したルートをたどり、C1で再パッキング。必要なデポ装備を回収し、不必要なものはテントに入れておいた。ここで時間的に余裕があったため、カップヌードルを食して一息つく。

ここから氷河歩きが始まり、コンテでの行動となる。ルート工作は済んでいたため、順調に進んだ。途中でC2の標高差100m下付近にデポしていたFixロープなどを回収した。

C2はランダックの手前のピークへの登りが始まるプラトーとした。安定したスペースで、何よりロケーションが最高だ。水分を多くとることを意識して食事を済ませ、明日への期待と不安を抱きつつシュラフにもぐりこんだ。

11月8日(日)快晴 C2~山頂~C2

6:50、無風快晴の好条件のもとアタックを開始。蒲澤、花谷、塩谷のオーダーでロープをつないで歩き出す。C2から緩やかなリッジをたどり、次第に傾斜が増すあたりからスクリュ、スノーバーで中間支点をとりながら進んだ。C2から見えていたセラックは左に巻いていったが、蒲澤がトラバースしすぎてしまう。ここから花谷がトップに行くことになった。

1pでリッジに上がり、手前のピークは岩とコンタクトラインを登った。中間部で休憩を取り、レーションを流し込む。手前のピークの上に立つと、気の抜けない吊尾根が山頂へと続いていた。それぞれがそこで何を思ったか、あまり言葉にすることなく頂上への道を進んでいった。若い二人はとにかく必死だった。

最低コルから40mほど登り返して南側に回り込み、広い氷雪壁の斜面に出る。そこから2pロープを伸ばすとそこが山頂だった。感傷に浸っている間もなく、写真だけとって下降を開始する。最低コルまでは計3pの懸垂下降。吊尾根は中間支点を取りながらのコンテで行動した。手前のピークの肩から一時塩谷が先頭に行くが、中間部の懸垂下降点より再び花谷がトップとなる。その先もコンテで進み、セラックの横を懸垂下降して安全圏に抜けたころには、すっかり日が落ちていた。気温が急激に下がる中、ようやくC2に帰還。一同疲労困憊であったが、安堵の笑みが広がった。

11月9日(月) C2~BC

遅めに起床。全員顔がむくんでいる。今日は降りるだけだが、氷河のちょっとした登りがつらい。氷河末端の急傾斜地を確実に下ると、C1で柏、榊原、それにサーダーのダワさんが温かい飲み物をつくって迎えてくれた。もう一頑張りでBCに到着し、待っていてくれたコスモのスタッフとも熱い握手を交わした。

ランシャール 11/13~15 (蒲澤)

11/13 快晴 BC~パマルカの科尔直下

前日の偵察で決定した通り、ランシャール東面の岩稜からのアタックを断念し、一旦パマルカとラングムチェリの中の科尔からランシャール西面に回りそこからの登頂を目指した。この日は岩の上に薄くのった雪と脆いガレ場のため思うように標高を上げることができず、科尔を越えて氷河まで行く予定であったが、科尔の直下にテントを張ることにした。幸いにも岩と雪溪の境界にテント設営適地が見つかり、この日はそこで終了とした。この判断には、天気予報により翌日の午後から前述の科尔を強風が吹き抜けることが予報されていたことも影響している。

コースタイム

7:15 BC 発

11:35 ガレ場を抜け雪面へ、ここでロープを繋ぐ

13:20 テント設営地

11/14 快晴および強風 パマルカの科尔直下~ランシャール峰~パマルカの科尔直下

明け方にアタック装備で出発した。この時点では風もそれほど強くなく、科尔を通過することができた。氷河へは斜度の緩いところを選びながら慎重に下った。氷河上は一面が固い氷でさながらスケートリンクのようであった。パマルカを横目に見ながら氷河上を進み、ランシャール峰山頂直下の台地を目指した。ここでは膝まで埋まるラッセルやモナカ雪に苦勞しながらクレバスを避けて通過した。山頂直下は最大斜度 45 度程度の氷壁であった。ここは花谷がリードし、蒲澤を引き上げる形をとった。午前 10 時半に登頂し、すぐに下降を開始した。下降は花谷が先に蒲澤を下し、次に蒲澤が花谷を確保しながら降りた。下降を開始した頃から強風が吹き始め、時々耐風姿勢をとらなければならなかった。氷河への下降路は往路ではなく、ランダック方面から氷河へ降りた。これはランダック方面の方が傾斜も緩く、下降しやすいと判断したためである。固い氷の氷河を下降し、パマルカ南方の科尔へ登った。科尔付近は予報通り風が強く、飛雪で視界が遮られるほどであった。風が弱まる合間をぬって科尔の東面に抜けると打って変って風が弱まった。そこからは往路を引き返しテント設営地に戻った。2 人とも疲労していたためその日はテントに泊まり翌日 BC へ向かうことにした。

コースタイム

4:20 出発

5:30 パマルカ南方の科尔

6:20 氷河に降りる
8:50 パマルカ・ランシャール間のコル
9:30 ランシャール峰山頂直下の台地
10:30 ランシャール峰山頂
12:00 氷河下降開始
14:30 パマルカ南方のコル通過
15:20 テント設営地
11/15 快晴 パマルカのコル直下～BC

日も昇りきった午前7時頃テント設営地を出発した。ガレ場を慎重に下り、偵察時に来た丘陵に到着した。振り返ると昨日苦勞して通過したコルでは激しく雪が舞っていた。その後はゆっくりとBCに戻った。

コースタイム

7:00 出発

10:10 BC

装備報告

松田・塩谷

今回は雪稜がメインのランダックと岩稜のラインがメインのランシャールという性格の異なる2つのピークを目指した。6名の構成人数、対象となる山の情報が少ない中写真からランダックは顕著な双耳峰であり山頂直下のコルへの下降、登り返しを考慮しダイナーマのFIX用ザイルを用意した。(松田)

○実際に使用した装備

ランダック登攀装備(実際に持っていったもの)					
分類	品名	規格	数量	備考	
登攀具	クライミングロープ	7.7mm60m	2		
	FIX用ロープ	6.5mm60m	1		
	捨て縄	6.0mm5m	1		
	スノーバー	T型	3		
	アイスクリュウ	22cm	2	アバラコフ用	
	アイスクリュウ	16cm	3		
	ピトン	ナイフ	5		
		アングル	3		
		アルパインクイックドロ	60cmスリング+ピナ	10	
		ダイナーマスリング	120cm	2	
生活用品	カラピナ	安全環	2		
	ストーブ	JETボイル	1	1.8L×1	
	食器		3	アコーディオンカップ	
	燃料	ガス缶	3		
	水ポリタン	4L	1	4L,6L各1つずつ	
	テント	3人用	2	Xサイズ3人用+フライ×1	
	テントマット		5	ベース兼用	
	雪袋		1	土嚢袋、予備1つ	
	ツェルト	2~3人用	2		

ランシャール登攀装備(実際に持っていったもの)					
分類	品名	規格	数量	備考	
登攀具	クライミングロープ	7.7mm60m	1		
	FIX用ロープ	6.5mm60m	1		
	捨て縄	6.0mm5m	1		
	スノーバー	T型	2		
	アイスクリュウ	22cm	1	アバラコフ用	
	アイスクリュウ	16cm	2		
	ピトン	ナイフ	-		
		アングル	-		
		アルパインクイックドロ	60cmスリング+ピナ	2	
		ダイナーマスリング	120cm	2	
生活用品	カラピナ	安全環	2		
	ストーブ	JETボイル	1	0.8L	
	食器		2	アコーディオンカップ	
	燃料	ガス缶	2		
	水ポリタン	4L	1	4L	
	テント	2人用	1	Xサイズ2人用	
	テントマット		1	ベース兼用	
	雪袋		1		
	ツェルト	2~3人用	-		

アタックでは、上記の装備を携行した。今回 FIX 用ロープは使用しなかったが、人数が増えたり、実際の山の状況によっては使用する機会があっただろう。ランダックは岩の要素はほぼなかったので、カムやナッツは持っていかず、スノーバーとスクリューで支点を構築した。ランシャールにおいても、当初予定したリッジを断念したため、岩系のギアは最小限とした。実際のアタックで持っていた装備では、過不足はなかったように思う。

BC では基本的に個人テントとし、学生 3 人が 6 人用テント 1 つで生活することになっていたが、松田が先に下山したため 2 人でテントを使用した。結果、それほどストレスをためることはなかったが、3 人だと少々窮屈に感じてしまうかもしれない。

またハイキャンプで泊まった人数、日数が少なかつたため、食料同様ガス缶を大量に余らせてしまった。ダンボールひと箱分は完全に未使用であったので、返品させてもらった。

BC での電源確保は、ソーラーパネルからリチウムイオンバッテリーに充電するという方法をとった。隊の通信機器はもちろん、個人のカメラやスマホ、音楽機器の充電まで、十分に賄うことができた。(塩谷)

BC 以降 共同装備)				
分類	品名	規格	数量	備考
	クライミングロープ	7.7mm60m	2	
		8.0mm60m	1	
		8.9mm60m	1	
	FIX 用ロープ	6.5mm60m	2	
	FIX 用ロープ	7.5mm60m	2	
	捨て縄	6.0mm30m	1	
	スノーバー	T 型	5	
	アイスクリュー	22 cm	2	アバラコフ用
	アイスクリュー	16 cm	3	
	ピトン	ナイフ	5	
		アングル	3	
	アルパインクイックドロ	60 cmスリング+ピナ	10	
	ダイニーマスリング	120 cm	2	
		180 cm	1	
	カラピナ	安全環	2	
	キャメロット	#0.2~2	1セット	
	トライカム	#0.5~5	1セット	中間サイズ#3.5.4を除く
	ナッツ	スモールサイズ	1セット	
	ストーブ	JET ボイル	3	1.8L×2、予備0.8L×1
	食器		6	アコーディオンカップ
	燃料	ガス缶	70	3人/1泊/2個で計算+予備2個
	水ポリタン	4L、6L	2	4L,6L各1つずつ
	テント	3人用	2	X ライズ3人用+フライ×1
		2人用	1	X ライズ2人用
	テントマット		5	ベース兼用
	トイレトペーパー		適	現地で購入
	ポリ袋		適	
	雪袋		3	土嚢袋、予備1つ
	スコップ		2	
	補修具			ダクトテープなど
その他	ツェルト	2~3人用	2	
		1人用	1	

BC以降 個人装備)				
分類	品名	規格	数量	備考
ウェア	アンダーウェア		1セット	
	中間着		1	
	保温着		1	
	シェル (上)		1	
	シェル (下)		1	
	ビレイジャケット	ダウンor化繊	1	保温性の高いもの
	保温パンツ		適	必要に応じて各自判断
	バラクラバ		1+α	必要に応じて薄手、厚手を用意
	ウインドブレーカー		適	必要に応じて各自判断
グローブ	グローブ		2+α	保温性の高いもの。数量は各自で考慮
	オーバーグローブ		2	5本指とミトンを1つずつ
足周り	登山靴		1	高所に適したもの
	ゲイター		1	オーバーシューズなどでも可
	靴下	ネオプレーンなど	2+α	保温性、数量は各自で考慮。
その他	サングラス		1	
	帽子		適	
	ヘルメット		1	
ギア	ハーネス		1	
	PAS		1	自作でもOK
	ビレイデバイス		1	ビレイ、下降兼用、専用のカラビナを用意
	マッシュャースリング		1	
	ナイフ		1	
	ユマール		1	
	アイスアックス		2	
	クランポン		1+α	オーソドックスなものと同登攀用
	アイススクリュウ	16cm	1	
	アバラコフフック		1	
	カラビナ	ワイヤーゲート	3	軽量なもの
		安環	2	
	スリング	120cm	1	
		60cm	2	
	生活	日焼け止め		1
リップ			1	日本で購入、UV耐性のあるもの
シュラフ		ダウン	1	薄手のもの
テントシューズ			1	
マットレス		ウレタン	1	新品、2/3身用
ヘッドランプ			1	予備電池
ザック			1	50L程度
ナルゲン			1	1000ml
箸、スプーン			1	
テルモス			1	800m程度、保温性の高いもの
シヨポリ			1	各自サイズに合わせて
各自医療品など			適	常備薬、テーピングなど

食糧報告

塩谷

〈キャラバン及び BC〉

今回、キャラバン中はバッテリーで食事をとり、BC ではネパール人スタッフのアレンジに任せた。よってキャラバン及び BC の食料として国内で準備したものはごく一部で、おおよそ以下の通りである。

- ・カレールー
- ・醤油、だしなど調味料各種
- ・フリーズドライ味噌汁、粉末飲料各種
- ・ふりかけ各種
- ・アミノバイタル

BC でネパール人スタッフの作る食事は非常においしくて、何も持っていかなくても困らないほどである。花谷さんの指示で持っていく最低限に抑えたので、おおむね適切だったように思う。ただ、キャラバン用に一人当たり 3 本のアミノバイタルを用意したが、行程的には余裕があったため、相当数余らせてしまった。

〈ハイキャンプ〉

今回は、日清食品様に「カレーメシ」などのアルファ米、カップヌードルのリフィルをご提供いただき、これを主食とした。日清食品のアルファ米は、電子レンジでの調理を前提にしたものだが、普通のアルファ米のように熱湯を入れて 20 分で、ほぼ芯もなく出来上がる。味もよく、種類も豊富でおおむね好評だった。私は高所登山の経験がなく、食事の量が少ないのではないかという不安もあったが、一食の量はほぼ適当であった。また、飲料の種類を豊富にしたことで、水分補給をスムーズに行うことができたのはよかったと思う。疲労が蓄積すると食料を受け付けなくなるので、飲料を充実させることの方が高所では重要であることを強く実感した。

行動食のチョコレートバー、ビスケットは、ルクラフライトのオーバーチャージを考慮して、カトマンズではなくルクラで調達した。一つの店ではそろわなかったが、いくつかの店舗を回って、問題なく購入することができた。

食料係としての一番の反省は、大量の食料を余らせてしまったことである。その主な原因は、ハイキャンプで幕営した日数と人数が少なかったことだ。ランダック、ランシャールの登山期間のうち、順応や偵察などで BC を起点にする日もあるし、天候や体調により停滞する日もある。そういった不確定さを考慮すると多少食料が余ってしまうことは致し方ないが、それにしても余らせす

ぎてしまった。ヒマラヤ登山のイメージがつかず、6人分×17日間という機械的な計画を立ててしまったことが問題であった。今回はこの経験を生かして柔軟な計画を練りたい。

以下は、1人当たりの1日の食料である。

○行動食

カーボショット×3、ビスケット×5枚、飴×3、アミノ酸入りドリンク×1、アミノバイタル×3

○朝食

カップヌードルリフィル×1、ドライフルーツ 50g

○夕食

カップラーメンリフィル×1/2個、日清食品アルファ米×1、お吸い物/味噌汁×適

カップヌードルは計135個、日清食品アルファ米は計90個用意し、それぞれ86個、67個のあまりが出てしまった。余った食料はふもとのタランガの住人に引き取ってもらった。

医療報告

榊原嘉彦

今回の遠征は比較的小規模なものであり、特別に医者への帯同は計画されていなかった。

登山隊員の一人である私榊原がたまたま医師免許を持っていたため、チームドクターとしての役目をお引受けすることとなった。こうした経緯に加えシンプルな遠征を目指していたこともあり医薬品類は必要最低限のもののみを持参した。

今遠征中の一番の重症例は高地肺水腫 **HAPE** である。患者は往路キャラバン中、ターメ（標高 3800M）に入った日の夜から頻回の咳と呼吸困難感があった。臥床すると症状が悪化したとのことだった。翌朝私が診察した時点では、**SpO2** が 80 台前半、呼吸数の増加と湿性の咳も見られた。聴診上は明らかな水泡音は聞かれなかったが **HAPE** が疑われ高度を下げることにした。なんとか歩行はできる状態だったので、徒歩でナムチェ（標高 3400M）に降りた。

ナムチェのバグティに着いてからも症状は治まらず、かえって悪化してきていた。ヘリでカトマンズへ搬送することに決めた。グローバルレスキュー社を通してヘリの手配はできたが、そのころには村全体が濃いガスに覆われ、また日も暮れ始めていた。結果ヘリの飛来は翌朝に持ち越された。ダイアモックスとアダラート **CR** を投与すると、しばらくは自覚症状を落ち着くようだった。夜間は背中の下に布団を丸めて押し込み、ギャッチアップした体勢で少しは眠れたようだった。隣で寝ていた私が、朝が来るのがどれほど待ち遠しかったのかは言うまでもない。

翌朝、天候は回復し予定通りヘリが飛んだ。患者はカトマンズに着いたらすっかり症状は軽快した。病院の診察でも異常は認めずその日のうちにホテルに帰った。

次の重症例は気管支炎のためやはりヘリにてカトマンズの病院に搬送した。ナムチェに着いた翌日から発熱。当初はただの感冒と思い解熱鎮痛剤の投与を行っていたが、3日たっても解熱せず。患者本人の希望もありヘリを呼ぶことになった。入院し抗生物質の点滴投与を数日受けようやく改善した。カトマンズのホテルで静養の後、戦線に復帰した。

これら 2 例以外はさほど重症者はず、いくつかのマイナートラブルに対して投薬した。軽度の急性膀胱炎のためクラビットを投与。急性高山病による頭痛に対してイブプロフェンを投与。下痢に対して整腸剤とロペミンを使用したなどである。

カトマンズ空港で帰国便を待つ間から、榊原はひどい水様便に襲われた。1 時間に1度はトイレに駆け込む状況がその後2日間続いた。おそらくランブル鞭毛虫などの寄生虫感染だったのだろう。メトロニダゾールを持っていくべきだった。

2度もヘリを飛ばすことになったが、幸い全員無事に帰国できた。私にとっても国際山岳医として貴重な経験を積むことができた。

持参薬品一覧				
		薬品名	規格	持参数
内服薬	解熱剤・鎮痛剤	ロキソニン	60mg	30錠
		イブプロフェン	200mg	30錠
	鎮咳剤	フスコデ		30錠
	胃腸薬	ランソプラゾール	15mg	20錠
		ブチルスコポラミン	10mg	20錠
	制吐剤	ペラプリン	5mg	10錠
	整腸剤	ミヤBM	20mg	20錠
	止痢剤	ロペミン	1mg	20錠
	抗菌剤	クラビット	500mg	10錠
	抗ウイルス剤	バラシクロビル	500mg	30錠
	抗アレルギー剤	フェキソフェナジン	60mg	20錠
	高山病	ダイアモックス	250mg	30錠
		アダラーICR	20mg	10錠
		デカドロン錠	0.5mg	60錠
	下剤	プルゼニド	12mg	20錠
外用薬・注射薬	点眼剤	ヒアレインミニ点眼薬	0.3% 0.4ml	10本
		リンデロン点眼点耳点鼻薬	0.1% 5ml	1本
	制吐剤	ナウゼリン坐薬	30mg	10錠
	鎮痛剤	ボルタレン坐薬	50mg	10錠
	軟膏類	ゲンタシン軟膏	0.1% 10g	1本
		アクアチムクリーム	1% 10g	1本
		アラセナA軟膏	3% 5g	1本
		リドメックス軟膏	0.3% 5g	2本
		強カレスタミンコーチゾン軟膏	10g	1本
		モーラスパップ	6枚入り	10包
		アドレナリン注0.1%	1ml	2本

医療 機材 等	包帯		2	
	カットバン			
	ステリストリップテープ			
	サムスプリント		1	
	三角巾		1	
	ガーゼ			
	酒精綿			
	テーピング用テープ	伸縮性		1
		非伸縮性テープ		1
	医療用手袋	非滅菌		10
		滅菌		2
	爪切り		1	
	ピンセット		1	
	はさみ		1	
	とげぬき		1	
	体温計		1	
	パルスオキシメーター		1	
	聴診器		1	
	血圧計		1	

会計報告

蒲澤・花谷

【収入の部】

■ 隊員個人負担金 計 2,100,000 円

60 万円×2 名 (榊原、柏)

30 万円×3 名 (松田、塩谷、蒲澤)

■ 協力企業収入 計 4,950,000 円

合計 7,050,000 円

【支出の部】

■ 国内支出 計 833,223 円

合宿費 80,818 円

装備品購入 204,489 円

食料品購入 103,680 円

通信費 (通信機器レンタル料・通信料) 336,236 円

外注費 (天気予報) 108,000 円

■ 国外支出 計 4,822,611 円

ネパールビザ代 73,800 円 (\$600)

カトマンズ滞在費 (宿泊費) 382,161 円 (\$3,107)

カトマンズ滞在費 (食事等) 112,970 円 (97,267RS)

エージェント支払い 3,279,549 円 (\$26,663)

(手数料、登山料、国立公園、ネパール人スタッフ 3 名分装備、保険、輸送費)

食料品、燃料購入費 248,160 円 (213,666RS)

装備品購入費 15,447 円 (13,300RS)

キャラバン費 591,080 円 (508,920RS)

キャラバン費内訳 日本人メンバー滞在費 238,467 円 (205,320RS)

ネパール人スタッフ滞在費 43,554 円 (37,500RS)

ポーター費 309,059 円 (266,100RS)

雑費 119,444 円 (102,841RS)

■ 救援・医療費 計 998,784 円

レスキューヘリ 768,750 円 (\$6,250)

病院受診 230,034 円 (198,060RS)

■ 花谷経費 計 663,560 円

国内旅費交通費 163,511 円

カトマンズ渡航費 (9月事前準備) 187,444 円

カトマンズ滞在費 (9月事前準備) 25,092 円 (\$204)

カトマンズ渡航費 (登山本番) 224,660 円

遭難対策費 (労山年会費、グローバルレスキュー) 62,853 円

合計 7,318,178 円

【収支】

収入合計 7,050,000 円

支出合計 7,318,178 円

▲268,178 円

*\$1=123 円 10 円=8.61RS で換算

*カトマンズまでの渡航費および保険費用は各自負担

円安の影響とネパール内の物価高騰により、想定以上に遠征費用が高額になってしまった。

また、今回の遠征では BC を一から設営したためポーターやキッチンスタッフの雇用費が掛ったことも遠征費が高額になった要因となった。遠征費用を抑えるためにも、無駄な支出を無くすよう心がけたい。国内からネパールへの装備・食料等の輸送に関しては、各自の機内預け荷物などの範囲で納めることができたため EMS 輸送費などはかからなかった。来年以降のヒマラヤキャンプに向け、カトマンズに装備をデポジットできたので今後も輸送費は抑えることができると思われる。

保険に関しては、隊員全員がアメリカの Global Rescue 社の会員になることで保険の代用とした。Global Rescue 社では要救護者の病院までの搬送を補償してくれるが、搬送のためには現地(アメリカ)の担当者に救助の必要性を説明しなければならない(日本語の通訳を介すことは可能だが、緊急時には不便を感じざるを得ない)。実際の搬送における対応は、ネパール国内の燃料不足に関わらずヘリを確保できたことを考えると良好である。Global Rescue 社を海外登山保険の代用として利用する場合の注意点としては、①保険ではないので死亡・傷害に対する補償がない②救援者費用なども含まれない③必ず先に Global Rescue 社に直接連絡をとり搬送の許可をとらなければならない(先に搬送を行ってから事後その費用を補填するといったことはできない)といった点が挙げられる。ちなみに Global Rescue 社の費用は社会人 1 人 429 米ドル、学生 1 人 359 米ドルであった(2015 年 10 月時点)。様々な補償が付くので簡単に比較はできないが日本山岳協会山岳共済会海外登山プランでの今遠征での見積もりは 114,450 円であった。

梱包・輸送報告

柏澄子

1) 日本→カトマンズ

9月の最終合宿の際に共同装備と食糧を梱包。内容ごとに通称「コンバイン」と呼んでいる穀物などを入れる農業用の袋に入れた。なかは、適宜ビニール袋で小分け。

9月中旬に花谷、柏がカトマンズに行く際に、合計 58 kgを運んだ。

10月の本番はメンバー6人が手分けをし、超過料金を払うことなく全装備・食糧を運ぶことができた。

2) カトマンズ→ルクラ

ダッフルバッグ、青ダル（カトマンズで購入）に入れ、輸送。青ダルは食糧に使用。ルクラの倉庫に保管する際にダッフルバッグではネズミの被害にあう可能性があるため。

ルクラフライトの受託手荷物は一人あたり 13 kg。手荷物について厳密な重量制限はなかったがバッグひとつ程度。そのためパッキングができたものから順次コスモトレックに預け、空港に運びフライト（カーゴ便、通常フライト）に載せる作業をしてもらう。9月に運んだ荷物は早めにフライトしたうえに、10月のカトマンズ滞在は4日あったため、モンスーン明けまでであったが、すべての荷物をメンバーのフライト前にルクラに送ることができた。

ルクラでは、宿の地下倉庫に保管してもらい、キャラバンに向けたパッキングも倉庫で行なった。

3) ルクラ→BC（キャラバン）

キャラバン中に使うもの（身の回り品、防寒着、シュラフ、マットなど）はおよそメンバー1人ひとつのダッフルバッグに詰め、毎日のバッチェの部屋に持ち込み使用できるようにした。パソコン、衛星電話などの貴重品はメンバーがザックに入れて背負って運んだ。

BCまで使わない装備、食糧はキャラバン中の荷物と区別してパッキング。基本的にBCまで荷をほどかないようにした。

ゾプキョ 16頭（1300Rs/1頭/1日、ゾプキョドライバー含む）とポーター2人（1500Rs/1人/1日）で輸送。ゾプキョは 60 kg、ポーターは 30 kgを運搬。

ゾプキョとポーターの手配はサーダーのダワさんに任せた。

4) BC→ルクラ（バックキャラバン）

BC撤収の4日前に、ダワさんがターメに下山して手配。ゾプキョ 9頭、ポーター0人。

5) ルクラ→カトマンズ

メンバー5人とスタッフ2人が11月20日にフライト。メンバー1人のみ翌21

日。荷物は順次送ったが、すべてがカトマンズに揃ったのは 23 日。燃料不足のためルクラ便の本数が減ったことが原因。

来年以降使用する共同装備の多くを青ダルに入れて、コスモトレックの倉庫に保管。

シュラフはすべてクリーニングに出し、乾燥剤を入れた。テントなど他の装備は日陰干し。

6) カトマンズ→日本

往路同様、各メンバーの受託荷物範囲内に収まり、超過料金はかからなかった。

とくに松田、蒲澤、塩谷が利用した中国東方航空が一人当たり 46 kg の受託荷物を受けており（タイ航空のビジネス 40 kg より多い）、これが功を奏した。

小規模でシンプルな登山のため、細かな輸送表（コンバインやダッフルバッグをナンバリングして、内容物を記したリスト）は作成しなかった。カトマンズ、ルクラ、BC の 3 か所で荷物を整理し直し、そのたびにだいたいの用途別に分けたうえで、重量や容量を整えてパッキングした。コンバインについては、マジックで内容を袋表面に列記した。

カトマンズにデポジット品を作ったので、来年以降も EMS などの別送品を作る必要はないだろう。

メンバー感想

ヒマラヤキャンプ感想

榊原嘉彦

「私も行きます。」

2014年の暮れに花谷さんから今回のヒマラヤキャンプのお誘いを受け、後先も考えずにすぐにそう返事をしたのを思い出す。ヒマラヤ遠征は積年の夢だった。それからは様々な準備で時間はすぐに過ぎていった。職場は退職するつもりだったので、帰国後の新しい仕事場の算段や、不在中の家族の生活のことなど決めなければならないことが沢山あった。結果、基本的なトレーニングを積む時間がとれず、遠征直前の国内合宿では体力面でリーダーから駄目出しされたのは大きな反省点だ。

ネパールに入国してからは、なにもかもが日本とは違う様子にただ感動・感激の連続だった。カトマンズでの準備、キャラバン、山が近づくにつれ高揚感は次第に高まった。

途中、病人がでて予定が遅れたが、ようやくBCに入った。そこで初めて目標の山をしっかりと見ることができた。色々な角度から双眼鏡で登山ルートを探る。上部は予想していたよりもかなり立っていて、「私には無理だな」というのが最初の印象だった。また、順応・荷上げ中、若手二人のスピードには全くついて行けなかった。

アタック直前まで迷いに迷ったが、自分は登らないという選択肢を選んだ。後悔が無いわけではないが、これが私の実力なのだと思う。

今回のキャンプを通じて、遠征のやり方については十分に学ぶことができた。いつの日か再びヒマラヤ遠征に行きたい。

ヒマラヤキャンプ 2015 に参加して

柏 澄子

私がヒマラヤキャンプに参加した動機づけは、ほかのメンバーとは少し違うかもしれない。

隊長の花谷さんからヒマラヤキャンプについて話を聞いたのは、昨年彼がテングラギタウの登山から帰ってきた直後だったと記憶している。ここ数年一緒にいくつかの仕事をし、またテングラギタウのときは途中までトレッキングを共にするなかで、彼がヒマラヤ登山においてどんな道を歩んできたのか垣間見る

ことができ、ヒマラヤキャンプに関心をもったからだ。

取材者という立場もあったが、あくまでチームの一員として行動していた。

出発直前に体調不良になり、国内合宿に十分に参加できなかったことは、反省点である。また登山については、ルートを遠望するに自分の実力だけで登れるとは考えられなかったので、ベースに残ることにした。力及ばなかったことは残念であるが、この選択は間違っていなかったと思う。

キャラバン中に花谷さんが病気のためにカトマンズに下山することになったり、松田くんは登山を続けられなかった。それぞれ残念ではあったが、残された私たちはペースを乱すことなく、安定してコマを進めることができたと思う。それは、副隊長の榊原さんのリードがあり、また蒲澤くん、塩谷くんがモチベーションを維持し自立して行動してくれたからだ。花谷さんが復帰したあとも、総じてチームワークはよかった。これが、今年のチームの最大の美点であり、学ぶことが多かった。

私自身は、関心のある土地に行き、贅沢な山歩きをし、また若手たちの登山への情熱に触れることができ、満足である。

キャンプへの参加は今回を最後とするが、今後もキャンプの継続と発展のために、仲間としてできることをやっていきたい。

松田浩和

信州大学山岳会 OB の松田です。今回のヒマラヤキャンプは自分にとっての初めての海外遠征でした。結果としては高地肺水腫によりヘリレスキューを要請し、ベースに入ることも出来ず目標の山を見ることなく自分のヒマラヤ登山は幕を下ろしました。つまり本登山に関しては何も感想がないのでレスキューのことについて少し書かせて頂きます。

今回自分はグローバルレスキューという海外の保険に加入しました。プランには医療保険が付くものとレスキューに関する費用のみのものがあり後者のプランを選択しました。グローバルレスキューが提唱するのはざっくり言えば「自宅から 100 マイル以上離れた地域で何かあった場合自宅まで搬送しますよ」というものです。また、一度の遠征ないしツアーの滞在日数によっても保険料は変わり、90 日間 1 年のプランで約 430 ドルでした。実際のレスキューに関しては本社に電話連絡しオペレーターとの直接のやりとりによって救助が必要かの判断がなされ、救助が必要と判断された場合は本社から現地の航空会社などに連絡が行きへりの手配となります。この際のやり取りは日本人オペレーターの通訳を挟むことも可能ですが基本英語でのやりとりとなりました。ヘリでピックアップ後はカトマンズの空港に搬送後、救急車で日本人や登山者の利用が多

い CIWEC CLINIC に搬送されました。その後の手続きとしては病院でグローバルレスキューに関する数枚の書類を書いたのとメールで本社と体調、日本への搬送の有無などについて簡単なやりとりを行いました。個人的感想とすれば体調の悪い中、英語でのやりとりなど少しのめんどろはありますが比較的速やかな搬送およびその後のやりとりであったと思います。また、医療費は実費となりましたがレスキューに関する保険費用は安く抑えられたので良かったと思います。

ここからは本登山には参加していませんがヒマラヤキャンプ全体を通した感想を綴らせて頂きます。前述のように自分はヘリでレスキューされました。高地での弱さについては肺水腫の既往症もあり遠征前から危惧されていましたし、花谷隊長からも「もし何かあった場合お前に引導を渡すのも俺の仕事や」など厳しい言葉も頂いていました。しかし、ヒマラヤへの憧れと未知への憧れから参加しましたが気持ちとは裏腹に身体は正直で全くついていきませんでした。カトマンズに降りた後、花谷隊長と話す機会があり身体のこと、もっと根底にある「登る」という本質的なことについて案の定厳しい言葉を頂きました。それからはホテルの部屋でも外出先でも日本に帰っても悶々とする日々、「何故山に登るんだ」という答えの出るはずもない自問自答、「自分は何がしたいんだ」という自問自答を繰り返す日々を過ごしました。そんな中とある OB との話の中で「人のために山に登る」という言葉が出てきました。登山とは自分のためのもので自己満足以上のものも以下のもないと思っていた自分にとっては本気でアルパインをやっていた先輩からのこの言葉は目から鱗でした。そして答えはそこにありました。

山のプロを育てる。ヒマラヤキャンプの掲げる目的の一つです。山のプロ、奥が深いです。プロと言ってもその道は登るプロ、ガイドとしてのプロ、書き手としてのプロ、医療としてのプロとその道は多岐にわたっています。じゃあ、自分は何のプロになるのか。それはガイドとしてのプロ、山と人を繋げるプロです。でも、お前今回の遠征で何も出来てねえじゃないか！というツッコミはあるかと思いますが、現役バリバリで海外の大きな山で活躍する OB やクライマーとの差を感じたのは事実。ただ、高いだけが山じゃない。日本の山はデカくはないかもしれないけど深い。そんな日本で山と人を深く繋げられるようなガイドを目指すつもりです。ヒマラヤキャンプが目指すバリバリのクライマーやガイドという道からは少し外れるかもしれませんが自分なりの山のプロを目指して行きたいです。今後は屋久島にてガイドとしての一步を踏み出そうと思います。

今回のヒマラヤキャンプは山には登れませんでしたでしたがヒマラヤの大きな山は絶望とともに新たな希望を、自分と本気で向き合う時間をくれました。最後にな

りましたが遠征を共に過ごした皆様、支援してくださった皆様本当にありがとうございました。

ヒマラヤ感想

蒲澤翔

一度大学を卒業し、信州大学に入り直した私にとってヒマラヤ山脈に行くというのは大きな目標でもあった。世界中の行きたい場所、それも他の人が行けない場所に自由に行けるようになりたいと考えて信州大学山岳会に入会した私にとって信州大学山岳会 OB で世界的クライマーの花谷さんにヒマラヤ遠征のお誘いを受けたのは願ってもない機会だった。またこの遠征が若手の育成を目的とし、計画・準備段階から遠征に参加できたことは私にとって大きな経験となった。

初めてメンバー全員で集合し、計画の概要を聞いた。ランダック・ランシャールを含む3座の未踏峰に挑戦する計画だった。(当時はネパール地震の前で、ロールワリン側からの登頂を目指していた。またその時点では未踏峰であった。) 聞いたこともない山でありヒマラヤの概念も掴めていなかった私だったが未踏峰に登るといふ花谷さんの話に魅了されていた。地震後ルートを変更することにはなったが、ランダック・ランシャールに登るといふ計画に変更はなかった。私は会計として国内では保険の調査を任された。国内だけでなく海外の保険会社も調査するのは言葉の問題もあって大変だった。実際にネパールに着いてからは会計の仕事も増え、やりがいがあった。特にキャラバンにかかる具体的費用(ポーター1人に掛る費用やバッチェの滞在費など)を知ることができたのは大きかった。キャラバンでは今まで触れたことのない文化・宗教・人と関わることができ、そのどれもが素晴らしく見え、とても楽しかった。BCについて初めてランダックを見たときは、登れる気がしなかったというよりも、登れるかそうでないか全く判断が付かなかった。何度か偵察に行ってもその判断はつけることができなかった。結局、自分で山を見て、頭で考えるということがあまりできなかった。この点が今遠征で私が最も反省しなければならない点だ。自分で先頭を歩いている時でさえも、花谷さんがどう判断しているかを判断しているような状況で、自ら山をみることができていなかったように思う。そのためにランダックでは隊を一時的に危険に晒してしまった。またランシャールでは偵察を怠ったのも反省しなければならない。ランダック登頂後の経験を生かして、自ら登れるルートを見つけるチャンスがあったかもしれないのにそれを逃してしまった。今回登らなかったランシャール東面の岩稜も、もっと取り付き近くまで行くことができたのにそうしなかったのは悔やまれる。未知の場所に行くに当たっては、十分な偵察と判断力が重要だと思い知らされた。ただ良

かった事として、未知の場所に行きたいという気持ちが私の中にあったことだ。ランシャールに行くかそれとも撤収するか問われた時に、まだまだ見たことのない景色をみてみたい気持ちが素直に出てきたのはうれしかった。

今回の遠征では、ネパールの素晴らしい文化やヒマラヤの広大なスケールの自然にふれることができるとも感動した。またそれとともに自分の技術不足と心構えの甘さを痛感させられた。また今後もこのような登山を続けるにあたっての、登山と金銭面・時間面の問題も具体的に考えるようになった。花谷さんが遠征中に何度か言っていたように『行きたい』と『行く』の間には大きな差がある」ことを痛感した。今後どのように『行く』を実現して行くかが今の私の課題だ。

最後に、今遠征にお誘いいただいた花谷さん、豊富な知識で隊を支えてくれた榊原さん、常に隊を明るくしてくれた柏さん、国内でも様々な場所に連れて行ってくれた松田さん、山岳会の同期として協力してくれた塩谷、小川勝山岳基金により遠征資金補助をいただいた信州大学学士山岳会、遠征に協力してくれた信州大学山岳会、そして寛容な心で理解と協力を与えてくれる家族に感謝申し上げます。

塩谷

ランダックからの下降を終え、私の中を支配していた感情は充実感や達成感ではなく、悔しさだった。急峻で巨大な山々に囲まれながら、ダブルアックスで雪とも氷ともつかないような斜面を登っていく。初めての条件のもとで、私は完全に山に飲まれ、萎縮していた。カメラを取り出す余裕も、積極的にコミュニケーションをとる余裕もなかった。

結果的に、自分たちでは何もできず、ほぼすべてを花谷さんにお任せするかたちとなってしまった。それだけに終わらず、ロープをキンクさせたり、指示されてから行動するなど、フォローしての役割も円滑にこなすことができなかった。

このように、私の初ヒマラヤはピークに立つことはできたが、内容的には惨敗だった。現状での最大限のパフォーマンスを出すこともできずに、消化不良に終わった。それは、ヒマラヤを登るうえでの圧倒的な技術不足と、精神的な未熟さに起因しているだろう。

それでも、私はヒマラヤにまた来たいと思った。理由を言葉にするのは困難だが、心にフィットするものがあつたし、花谷さんが人生をかけて取り組む理由がわかったような気がする。

これからは自分がどんな山登りがしたくて、それにはどんな能力が必要で、

自分には何が足りないのかということに常に意識していこうと思う。ただ重い荷物を背負って、歩くだけでは幅は広がっていかない。今回の遠征で、自分の足りないものが否応なくさらけ出され、先鋭的な登山を目指すうえで必要なことが明確に分かった。具体的にはロープ操作の速さと、登攀技術の向上。そして当たり前前を当たり前前にこなす生活力。これからは、ロープを積極的に使うルートで、スピードを意識したりしながら経験を積んでいこうと思う。また、長期にわたって登山をする際、お互いにストレスをためないようにすることは重要だ。私は周りに気を遣うことが欠けていた。メンバーが気持ちよく過ごせるように、もっと周りを見るようにしたい。

ヒマラヤキャンプを通して、将来のことを考えてきた。私の中では、一度ヒマラヤに行けば将来の展望が定まるかなという思いがあった。しかし、結果としてますますわからなくなってきたというのが正直なところである。花谷さんのように人生をかけてでも取り組む意味はわかった。だが、それと同時に多くの人に心配をかけていることも実感した。そして、これはヒマラヤに限ったことではないけれど、リスクということにも差し迫って考えさせられた。将来どのように、山と関わっていくのか。すぐに答えは出ないと思う。今は自分の登山を精一杯やって、考え続けていくつもりだ。

ネパールどころか海外が初めての私は、見るもの触れるものすべてが新鮮で、自分の受容できる量からあふれてしまうのではないかと思うほど、毎日毎日新しいものが押し寄せてきた。それは非常に幸せなことであつたし、多くのことを考えるきっかけとなった。カトマンズの匂い、人、ヒマラヤの巨大な山々。強烈な記憶や感覚として、今でも鮮明に思い出せる。この経験は人生の肥やしになるだろう。そして今回、ヒマラヤに登らせてもらったということは、今後の登山人生においても重要な意味を持つだろうし、これを何か自分を表現するための土台にしていきたいと思っている。生かすも殺すも、今後の自分次第だ。最後に、自分の登山は、多くの人に支えられて成し遂げられていることを、強く実感しました。感謝の気持ちをもって、その人たちを決して悲しませることのないよう、に登山を続けていくつもりです。このプロジェクトを企画してくださり、未熟な私たちをヒマラヤに連れて行ってくださった花谷さん、快く送り出してくれた山岳会のみなさん、私の気持ちを理解して支えてくれた両親、支援してくださったすべての皆様に心より感謝申し上げます。

スポンサーリスト

ヒマラヤキャンプ 2015 は、下記の皆さまにご支援いただきました。
心よりお礼申し上げます。

【スポンサー】

パタゴニア日本支社
日本ゴア株式会社
プロトレック（カシオ計算機株式会社）
株式会社 finetrack
グリベル（株式会社マジックマウンテン）
スポルティバジャパン株式会社
スーパーフィート（株式会社インパクトトレーディング）
株式会社ヤマテン
はちのへ西脳神経クリニック
麻美レディースクリニック
黒瀧眼科医院

【サポート】

株式会社アライテント
ナンガ（有限会社コスモス）
MSR（株式会社モチヅキ）
ショッツ（株式会社 TCF ショッツ・ジャパン）
オークリージャパン株式会社

メディア掲載

テレビ

NHK 長野放送局 「きらり旬の人」

NHK 甲府放送局

ラジオ

FM-FUJI

FM-Yokohama

新聞

山梨日日新聞

朝日新聞

産経新聞

毎日新聞

山岳雑誌

フリーペーパー「山歩みち」

山と溪谷

PEAKS

ウィルダネス

その他媒体

晴耕雨読

展望

花谷泰広

まずは最初の一步を踏み出すこと。それが大切である。

いつかはヒマラヤに行きたいと思いついて描いている者は多いだろう。しかし、その思いを実行に移すとなると、まずは越えなければならないハードルが存在する。その原因はひとそれぞれだが、そのハードルを越えた、ある意味腹をくくった者だけがこの合宿に参加している。それだけでも奇跡的ではないだろうか。

2016年の募集を開始するにあたり、一番怖かったことは、応募がないことであつた。しかしそれは心配しすぎだつたようだ。実際は学生・社会人合わせて10名の応募があり、選考に苦慮する事態となつた。再来年度はさらに応募が増えるだろう。今からとても楽しみである。

1月中旬に、来年度のヒマラヤキャンプのメンバーが決定した。

完全な公募で集まり、書類選考と最終選考(3日間かけて会話し、山に登り、お互いの相性を見た)を経て選んだメンバーだ。以前から面識がある者もいるが、ほとんどは初めて顔を合わせる者ばかりである。21歳から31歳。男性4名、女性2名。私も加えると、年齢も性別もバックグラウンドも違う7名である。この7人が今後どういう化学反応を起こしていくのか、楽しみである。

昨年もそうだったが、私の世代の考え方と今の若者の考え方は違う。私の価値観を押し付けるのではなく、彼らとのコミュニケーションを楽しみたいと思う。本番に向けたチームビルディングは始まったばかりだが、このプロジェクトはヒマラヤまでに何度も顔を合わし、山に登る。その時間を通して、心から信頼し合えるチームに仕上げたい。この点は、昨年度は私が後輩に声をかけて募つたメンバーで構成されていたので、ある意味やりやすかつたと言える。真価を問われるのは間違いなく来年度だ。

ヒマラヤキャンプは人材育成のプロジェクトである。これからもいい登山を続けてもらいたいし、大いに活躍してもらいたいと心から願っている。そして参加メンバーには、何らかの形でこの業界にとどまり、活躍してもらいたいという思いは強い。最終的にはこの業界の未来を見据えた活動ができる人材に育ててほしいが、まずはこの業界で生活の糧を得ながらも、しっかりと登ることができるようになってほしい。今はまだそれを実現させている者は少ないのが現状だが、10年後には今よりもそれを実現できる者を増やしていきたい。私はこのプロジェクトを、できれば10年続けたいと思っている。打ち上げ花火で数回やることは誰にでもできる。しかしそれでは意味がない。大切なことは、未来へつなげることだ。たとえ10年続けたとしても、一緒にヒマラヤに行けるのは100人に満たない。しかし少人数であってもそこから人と人がつながり、様々な

連鎖を呼び起こすことができる。それにはある程度時間をかけて取り組むことが必要である。

個人的には、いつか参加メンバーが成長して、このプロジェクトのアシスタントとしてだけでなく、私の登山のパートナーになってくれるような出会いがあったら最高だと思う。

私の最終的な夢は、登山が日本の文化になることだ。これからは、より多くの人のライフスタイルに、登山というものが根付いてほしいと思っている。ヒマラヤキャンプで人材を育成するということは、その思いを次の世代に受け継いでもらいたいという願いも込めている。

文化になるまでには、まだまだ長い時間が必要だ。